



伊勢は文学が盛んな土地。  
当館のふるさと文庫にも、郷土出身の作家の作品が、所狭しと並んでいる。  
そんな中でも、俳句といえは、「俳聖」と呼ばれた松尾芭蕉・・・  
いや、伊勢には「俳祖」と呼ばれた荒木田守武がいる。

井原西鶴は、「西鶴名残の友」の冒頭で次のように述べている。

「神風や伊勢の國の山田に、風月長者荒木田氏の守武、はじめて俳諧の本式を立、是より世々の作者、天の岩戸のあかりをはしり、此道の廣き所をわきまへける。それまでは百韻つゞけるといふ事もなく、発句・脇・第三過ては、すゑずゑさし合の吟味もせず、前句覚てうち越をわすれ、是云捨に同じ。其節、守武、千句を出す事、ならびなき作者、守武・宗鑑を俳諧の父母ともいへり。是も和哥の一ていなれば、神國のもてあそびによろし。さるによつて山田は、すゑずゑ作者の絶ぬ所なり。」



(伊勢の國の山田の長者で風流人の荒木田守武は、はじめて俳諧の本式を立てた人で、それより世々の作者は、天の岩戸が開いた時のように隠れた所が明らかになったので、俳諧の道の広さをわきまえるようになった。それまでは百韻を続けるということもなく、発句・脇・第三を済ますと、あとは付け方の吟味もせず、前句との関係は心得ていても、前々句との関係を忘れるという始末で、これでは即興的な詠み捨てと変わりがなかった。そういう時代に、守武が正式に千句を発表したのは、まったく並ぶものない作者であった。それゆゑ守武と宗鑑を俳諧の父母というのである。俳諧も和歌の一体であるから、神國のもてあそびとして、ふさわしいものである。そんなわけで、山田は後世に至るまで、俳人の絶えないところとなっている。)

(明治書院「決定版 対訳西鶴全集16 西鶴俗つれづれ・西鶴名残の友」より)

守武は応仁の乱の最中に宇治で生まれ、激動の時代を神宮の禰宜として奉仕した。  
そういった時代に、誰もが作れそうな最も短い詩型を世の中にもたらしことは、意味のあることだと守武は考えたのだろう。

守武が五十三歳のときに生まれたのが「世中百首」。これは「伊勢論語」とも呼ばれ人々に親しまれた。

一、世中の親に孝ある人はただ何につけてもたのもしきかな

・・・

百、天照す神の教へをそむかずば人は世中富貴繁昌

守武はこの「世中百首」をたった一晚で考えたという。

戦国の世、混乱が続く世の中でも、神宮に仕える禰宜として、平生の心をもって句を詠み、そしてそれが人々に受け入れられていたのである。

メディアでは暗いニュースがあふれ、世知辛い世の中になっている今日、「世中百首」はずしんと胸に響く。

そして年が明け、やってくる新年・・・。

新しい年の始まりのすがすがしい雰囲気から、遠い神代の時代に思いを馳せた次の句は、守武があくまでも謹厳実直な神官であったことをあらわしている。

元日や神代のことも思はるる

- ◆ 荒木田守武 (俳祖守武翁顕彰会／編 俳祖荒木田守武没後四五〇年記念事業実行委員会 L913／ア)
- ◆ 宇治山田市史 下巻 (宇治山田市役所／編 国書刊行会 L243／ウ)
- ◆ 荒木田守武集 増補改訂 (神宮司廳 L913／ア)
- ◆ 伊勢神宮神官連歌の研究 (奥野純一／著 日本学術振興会 L912／オ)
- ◆ 伊勢の文学 (伊藤正雄／著 神宮文庫 L902／イ)

